佐竹先生と私

宇野　博二

佐竹先生が学習院大学に勤務されるようになったのは一九五二年四月である。それまでの文政学部が廃止され，文学部と政経学部に分かれ，政経学部に経済学科が創設されたときである。経済学関係の専任者でそれ以前からおられたのは松村先生ひとりで，東大におられた舞出，北山の両先生と佐竹先生と私が加わることになった。

当時の日本の社会は敗戦の荒廃からまだ十分回復しておらず，社会は激動混乱し，不安定な状態でした。このような状況のもとで，新しい学科を創るという大変なことを僅か五人のスタッフで始めねばならなかった。既に老大家であった舞出先生を助けて北山先生が実質的なリーダーとなり，我々若手三人はその指示をうけて，緊密に連絡をとり，批判したり議論したりしながら，創設期の人事や教務関係等いろいろのルール作りを進めてゆかねばならなかった。

佐竹先生は温厚謙遜で気どったところがない，もの静で親切な方でしたが，筋は通すといった芯の強い人でした。先生のような方と一緒に仕事ができたのは，ほんとうに幸運であったと思っています。

その後，更にスタッフが充実され，学生数も増加し，教室，研究室，体育館，事務室等の建物も増設され，ピラミッド教室が中央広場にシンボルとして建てられた。

そして一九六四年には政経学部は廃止され，法学部と経済学部（経済学科）に分かれ，七四年には経済学部に経営学科が創設された。佐竹先生は初代の経営学科主任として今日の経営学科発展の基礎固めに尽力された。また七四年四月から七九年三月まで経済学部長を勤められ，経済学部にだけなかった大学院の創設に力を傾けられ，経営学研究科及び経済学研究科の両大学院を設立されました。先生は経済学部にとって重要な時期に要職につかれ，経済学部ひいては学習院大学の発展のために貢献されました。いろいろご苦労の多かったことと思います。

共同住宅が新しく出来たので，私は長女の出産と同時に入居した。私は四階でしたが，一階に先生の親友の川北先生がおられたこともあり，舎宅へよく来られ，私の処へも度々立ち寄って下さった。佐竹先生は写真がお好きで，時々カメラを持って訪ねてこられ，娘の写真をとって下さった。娘の小さい頃の写真の多くは先生にとって頂いたものであり，彼女の成長のよい記録であった。

また先生は自然を愛され，美しい樹木の繁ったキャンパスを時々散歩しておられた。四季の変化，中でも史料館周辺の春の花と北一号館横の銀杏樹林の秋の黄葉のすばらしさを最も好んでおられたようである。そして以前の豊かな自然環境のキャンパスをなつかしがっておられた。

先生は夏の暑さに弱く，夏休みには長野県の戸隠の宿坊で毎年過ごしておられた。私も暑さに弱く，子供のためにもと思い黒姫山麓に小さな山小屋を建てた。私が一人で山小屋にいた時電話をしたところ丁度先生も戸隠におられ泊まりに来て下さった。翌日バスの停留所の近くまでゆく

と大きな麦藁帽子を被り，瓢々と歩いて来る人がいた。それが佐竹先生であった。夜遅くまでいろいろのことを論じ，蒲団に入ってからも互いにしゃべり続けていた。その時のことはいまもはっきりと思い出される。先生は私にとっては何でも気軽に相談し意見を伺うことができ，いつも的確な助言をして下さった有り難い先輩であった。

先生は戦時中の物のない学生時代に，私は戦後に肺結核をわずらい，二人とも余り健康にめぐまれているとはいえなかった。先生は自分のこと以上に私の身体のことを心配して下さり，四年前に定年退職された後もしばしばその後の体調について聞いて下さった。

三月末で私も退職するので，三月半ばにお逢いすることにしていた。お逢いする数日前に二月になさった痔の手術の予後がかんばしくなく痛むので失礼するという電話を頂いた。四月二五日夕方外出先から帰り玄関に入ると電話のベルがなっており，受話器をとると佐竹先生の訃報の知らせであった。あまりの突然のことで言葉がなかった。翌日早速お宅に伺い奥様からいろいろお話しを伺った。五月にでもなって私も雑用が一段落したら先生がお好きでよく歩かれた鎌倉でも案内して頂こうと思っていたのに，実現できなかったことはまことに残念である。

佐竹先生のご冥福を心からお祈りします。

本論文目次